

人間性の探究

第9回

マンダラ国家から国民国家へ： 「想像の共同体」の観点から

2020年度前期

1

* マンダラ国家から国民国家へ（復習）

・ 植民地化される以前の東南アジアの国家

= 「マンダラ国家」 (「銀河系的政体」「マンダラ・システム」モデル)

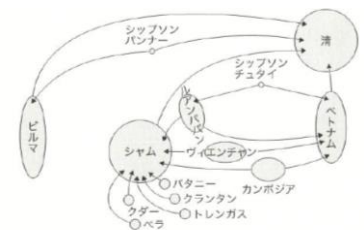
…ヒンドゥー教的・仏教的な世界観の影響を受けた国家

(世界の中心 = 聖なる山 ≡ 王宮 ≡ 王座、王の力が同心円状に広がる、明確な国境なし)

…大きな強い国は、より小さな国をいくつも引き付けて朝貢関係をもつ

…「海のマンダラ」と「陸のマンダラ」の力関係が織りなす歴史(中国の強い影響)

→大航海時代に始まる西洋諸国の進出と植民地化を契機に
「マンダラ国家」から、領土・国民・平等な主権を要素と
する近代的な「国民国家」へ



前近代東南アジアの国際関係 (19世紀シャムとその周辺)

2

* 「国民国家」と「ナショナリズム」

※ 「国民国家」 (nation state)

- ・ 至高なる領域としての国土（国家が空間的に占有している領域）を政治的に統治している民 (people) が、国民(nation)としての統一性やまとまりをもつ(あるいは、もたせようとしている) 国家(state)
- ・ 「国民国家」(≡「近代国家」「近代国民国家」)の誕生 ≡ **「国民」の誕生**

※ 「ナショナリズム」 (nationalism)

- ・ 「nation」(ネイション) = 「国民」「民族」「国家」
- 「nationalism」(ナショナリズム) = 「国民主義」「民族主義」「国家主義」
- = 「政治的な単位と民族的な単位とが一致しなければならないと主張する一つの政治的原理」(アーネスト・ゲルナー)
- = ある文化を共有する(と思われる)民族が、国民として政治的なまとまりをもち、国家をもつべきだとする考え方
- (=一つのネイションは一つの国家をもつべきだとする考え方)

3

3

* ナショナリズムの様々な形態（「一つのネイション＝一つの国家」）

- ・ 独立運動... ex. 第二次世界大戦前後のアジア・アフリカにおける植民地支配からの独立運動
- ・ 分離独立運動・分離志向... ex. スペイン・カタルーニャ、スコットランド、インドネシア・パプア、アチエ、東ティモール、地域共同体からの離脱(ブレグジット)
- ・ 統一・併合要求... ex. 「アメリカ合衆国51番目の州」をめざす運動
- ・ 戦争、軍国主義(「お国のために死ぬ」)
- ・ 国民としての一体感・国家との一体化による陶醉(優越感)... ex. ヘイト・スピーチ、「クールジャパン」、オリンピック、ワールドカップ
- ・ その他、移民排斥運動、歴史認識問題、国境紛争の激化 など

4

4

* ナショナリズムを理解することの意義

・ 18世紀～19世紀にかけて展開し、第二次世界大戦後に高揚期を迎えたナショナリズム
→ 国民国家の形成を促す

・ 現代社会におけるナショナリズムの高まり (民族紛争、国家の存在感↑)

(⇔ 20世紀後半の研究者たちの予想)

... グローバル化が進み、21世紀にはナショナリズムは歴史的使命を終えるだろう

→ 国民国家の成立を促した「ナショナリズム」はどのように誕生したのか？

5

5

* ベネディクト・アンダーソンの「想像の共同体 (Imagined Communities)」論

・ ベネディクト・アンダーソン (Benedict Anderson, 1936-1957)

... 英国人の母とアイルランド人の父をもち、中国雲南省昆明で誕生

... コーネル大学政治学部名誉教授

... 比較政治学、インドネシア研究に従事

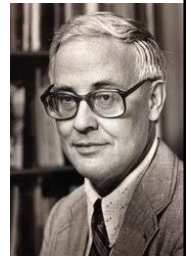
・ 主著：『定本 想像の共同体—ナショナリズムの起源と流行』

(白石隆・白石さや訳、書籍工房早山, 2007)

Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism (1983)

... 事例の分析に裏付けられたナショナリズム理論の構築

... ナショナリズム論の名著として、政治学、社会学をはじめ様々な学問分野に大きな影響を与える



6

※アンダーソンによる「ネーション」(=「国民」)の定義

=「国民とはイメージとして心に描かれた想像の政治共同体である—そしてそれは、本来的に限定され、かつ主権的なもの[最高の意思決定主体]として想像される」

- ・国民はイメージとして心の中に想像(imagined)されたものである
(=想像された共同体としての国民、国民は想像の中でしか存在しない)⇔家族、学友、同僚
- ・国民は限られたものとして想像される(=共同体の外に、対等な別の共同体を想定)⇔宗教共同体
- ・国民は主権的なものとして想像される(=啓蒙主義と革命を経て自由を保障された国民)
- ・国民は一つの共同体として想像される
(=たとえ現実には不平等と搾取があるにせよ、常に、水平的な深い同志愛として心に思い描かれる)

※「国民」=「文化的人造物」「想像の産物」=「想像の共同体」

7

7

アンダーソンの問い：

そして結局のところ、この同胞愛の故に、過去二世紀にわたり、数千、数百万の人々が、かくも限られた想像力の産物のために、殺し合い、あるいはむしろみずからすすんで死んでいったのである。

これらの死は、我々を、ナショナリズムの提起する中心的問題に正面から向かい合わせる。なぜ近年の（たかだか二世紀にしかない）萎びた想像力が、こんな途方もない犠牲を生み出すのか。[アンダーソン 2007:26]

※ナショナリズムの程度を測る一つの指標

=その国のために死ぬことのできる人がどれくらいいるのか

※本来はいくつかあるアイデンティティ(自己同一性=自分は何者か、何者でありたいか)の一つであるはずのナショナリズムが、最も重要なアイデンティティになったとき、そのために死ぬことには意味が与えられ、名誉となる

8

8

*ナショナリズムはどのように誕生したのか

※「国民」が誕生する以前のヨーロッパにあった2種類の共同体

- ・宗教共同体：神を頂点とした共同体、「聖なる言葉」による支配
- ・王国共同体：王を頂点とした共同体、「神から授かった正当性」による支配

この2つの共同体は密接に関連しながら、人々に人生の意味を与えていた
(人生の意味はいつの世も変わらず、神に救われることである)

→しかし、のちに2つの共同体の絶対性は揺らいでいく

9

9

*ナショナリズムの誕生を促した出来事

※印刷資本主義の発達：俗語の出版物の流通(とくに小説と新聞)

①「小説」がもたらす想像力の様式

《ある小説の設定》 男(A)には妻(B)と愛人(C)がおり、愛人(C)には別に情夫(D)がいる

＜時間Ⅰ＞	→	＜時間Ⅱ＞	→	＜時間Ⅲ＞
AがBと口論する		AがCに電話をする		Dがバーで酔っぱらう
CとDは情事をする		Bは買い物をする		AはBと家で食事をする
		Dは玉突きをする		Cは不吉な夢をみる

・小説の中で、AとD、BとDは一度も出会わない(お互いの存在すら知らない)が、読者は、彼らが一つの「社会」の中で暮らしていることを想像する

・読者は、離れた場所にいるそれぞれの登場人物の行動を全て同時に眺めることができる
(=読者は「神」の視点に立つ)

10

10

②「新聞」がもたらす想像力の様式

《国内記事面の例》

「貧しい労働者、風雨に曝され、道端で野垂れ死」

・読者にとって、死んだ浮浪者が一体誰なのかは問題でなく、読者は、浮浪者が代表する人間集団を想像する

《ニューヨーク・タイムズの一面の例》

「ソヴィエトの反体制活動家、マリの飢餓、残忍な殺人、イラクのクーデター、ジンバブエで発見された珍しい化石」などについての記事

・これらの事件はほとんど明らかに独立に起こっており、これら事件の当事者たちがお互い顔見知りだったり、他人が何をしようとしているのか知っていたりするわけではない

(恣意的な選別と配列、暦の上の偶然が想像上のつながりを生む)

・マリが2日間の飢餓の報道の後、数か月ずっと新聞のページから消えたとしても、読者は一瞬たりともマリが消え去ったとか、飢餓がそのすべての市民を一掃してしまったとは思えない

(読者は、どこか向こうの方で「登場人物」マリが次の出番を待ちながら
静かに移動しているのを確信している)

11

11

*小説と新聞(=2つの想像の様式)が人々の意識に与えた影響

・読者は、お互いを知らない登場人物の行動や、恣意的に選別されて並べられたニュースを全て同時に眺めることができる「神」の視点に立つ

・その言語を理解する不特定多数の人が、そうした「神」の視点に立ちながら、ニュースや話題を同時期に共有する

※小説・新聞の様式とナショナリズムとの類似

- ・互いに無関係であるが、外から眺めれば一つの所属(「社会」)が見える
- ・一つの同じ空間と時間を共有しているという感覚(=「均質で空虚な時間」)

→小説と新聞の流通が人々の意識を変え、平等な「国民」の意識を準備した

※さらに...

俗語 = 内面の言葉 → 強い連帯感や感情を生む

12

12

* ナショナリズムの誕生：3つの段階

<第1段階>

「下からのナショナリズム」...18～19世紀の南北アメリカ、ヨーロッパで起こったナショナリズム

<第2段階>

「公定ナショナリズム」...19世紀後半のロシア、プロイセン、日本、タイなどで起こったナショナリズム

<第3段階>

「最後の波」

...20世紀のアジア・アフリカの植民地で起こったナショナリズム

13

13

<第1段階> 「下からのナショナリズム」

・ 18～19世紀南北アメリカ、その後ヨーロッパで自然発生的に起こったナショナリズム

※「国民」意識 (=ナショナリズム) の誕生は、ヨーロッパよりも先に、その植民地である南北アメリカで起こった

・ 南北アメリカの「クレオール」 = 植民地で生まれ育った白人、のちに現地人との混血も含む概念

・ クレオールの官僚の宿命

...植民地内を点々としながら、出世コースの最終的なゴールである植民地の首都を目指す (⇔本国生まれの白人)

...彼らは、その過程で同じ境遇の人々と出会い、また植民地で発行された新聞を読む
(= 植民地官僚の「巡礼」の旅)

14

14

・クレオール植民地官僚の「巡礼の旅」

...本国人からの差別、官僚としての出世の限界、同じ運命をもつ仲間との共感

→自分たちは、本国人とは異なる「アメリカ人である」という意識が生まれる

（誇りと劣等感を含んだ「私たち」対「彼ら」という意識）

→やがて国のために命を懸けた独立運動へ

・18世紀～19世紀にかけて、アメリカ合衆国(1776)、パラグアイ(1811)、アルゼンチン(1816)、チリ(1818)、ペルー(1821)、メキシコ(1821)、ウルグアイ(1828)が独立

=ナショナリズムの誕生→のちにヨーロッパへ波及

15

15

<第2段階>「公定ナショナリズム」

・19世紀後半のロシア、プロイセン、日本、タイなどで起こった、意図的に上から導入されたナショナリズム

...後進国の支配者によるナショナリズムの利用（=上からのナショナリズム）

...産業化、軍国主義化を手段とする

(⇔ 第1段階の「下からのナショナリズム」=自然発生的にできたもの)

16

16

* 日本の明治藩閥政府によって導入された「公定ナショナリズム」の例

- ・プロシア・ドイツをモデルとした世紀半ばの「公定ナショナリズムの一変形」
- ・天皇の権限を利用した支配体制の構築

...藩兵の解体と天皇の軍隊創設、徴兵制の導入(1873)、学制による国民教育制度(1872)、天皇主権の憲法制定(1889)など

→「日本国民」「日本人」の創出（⇔農民、武士、藩人としてのアイデンティティ）

※日本におけるナショナリズム導入の成功を支えた3つの偶然的要素

- ...①江戸幕府による国内平定と2世紀半の孤立によってもたらされた日本人の比較的高い民族文化的同質性
- ...②天皇家の万邦無比の古さ、そしてそれが疑う余地なく日本的なものであること
- ...③夷人が突然、一挙に脅迫的に侵入してきたため、大多数の政治的意識をもつ住民は、新しい国民的枠組みで構想された国防計画に容易に結集できたこと

17

17

<第3段階>「最後の波」

・20世紀にアジア・アフリカの植民地で起こった植民地ナショナリズム

...蘭領東インド、仏領インドシナ、仏領西アフリカなど

...18～19世紀に南北アメリカで起こった第一段階の「下からのナショナリズム」と類似
(=ナショナリズムの領域的広がり、そこを支配した帝国の行政単位との一致)

※「最後の波」が起こった背景

- ①19世紀半ば以降、物理的な移動手段が飛躍的に発達(鉄道や蒸気船、自動車、航空機など)
→移動(旅)の活発化
- ②ヨーロッパ植民地の規模の拡大、支配人口の増加
→2つの言語ができる原住民官僚や技術者(医務官、灌漑技術者、農業指導員、学校教師、警察官など)の登場と増大による「巡礼者」の増加
- ③原住民官僚だけでなく、一般原住民にも近代的な知識を与えることの道徳的重要性の認識
→近代的な教育の普及

18

* 蘭領東インドにおけるナショナリズムの例

・ 蘭領東インド（後のインドネシア共和国）の状況

...巨大な領域(東西約5000キロ)、膨大な人口、地理的分散(約14,000の島々)、宗教的多様性、民族的多様性(約250 ?)、言語的多様性(200 ? 400 ?)

...その領域は、植民地時代以前のいかなる王国の領域とも一致しない

19

19

「国民」創出の不思議

「スマトラ東海岸のいくつかの民族は、狭いマラッカ海峡を越えてマレー半島西海岸の住民と物理的に近いばかりか、両者は、民族的にも親縁関係にあり、おたがい会話によって意志の疎通ができ、共通の宗教をもち、その他多くの点で共通するところが多い。そしてこれらスマトラ人は、その東方数千マイルも離れた島々に住むアンボン人とは、母語も違えば、民族、宗教的にもまったく異なっている。それでいてかれらは、今世紀には、アンボン人をインドネシア人同胞とし、マレー人を外国人としてみるようになった。」[アンダーソン 2007:196-197]

※インドネシアの国境線

= オランダが支配した領域の範囲とほぼ一致



20

* 蘭領東インドにおける「教育の巡礼」の旅

※「倫理政策」(1900年代～)のもとで普及された教育の特徴

...画一化された教科書、標準化された卒業証書と教員免状、学年制、学級編成、教材

...西洋の知識の教授(歴史：啓蒙思想、革命思想など)

...エリートに対するオランダ語による授業

...生徒は、小学校(村)→中学校・高校(大きな町と州都)→高等教育機関(首都バタヴィアやバンドゥン)、最終的にはハーグ、アムステルダム、レイデンへと移動

= 「教育の巡礼」

※西洋式教育がもたらした変化

・「教育の巡礼」と「行政の巡礼」(官僚の巡礼)により、「われわれ」意識と絆が生まれる
(=われわれ「インランデル」「ネイティブ」「土民」→のちに「インドネシア人」)

⇒彼ら「ヨーロッパ人」「外来東洋人」)

・オランダ語による西洋の知識の教授により、オランダ語を話し、西洋の理性を理解する原住民知識人が登場

→植民地支配の矛盾を批判し、われわれ「インドネシア人」の独立国家を望むようになる

21

* その他の「奇妙な偶然」：「インドネシア語」の誕生

・マレー語(⇒多様な民族と言語)

...もともとは多民族間の交易やイスラーム布教の言語(「リンガ・フランカ」：混成語)として広まる

...植民地支配初期にオランダ人が「行政マレー語」として採用

...18世紀半ば～出版資本主義とともにメディア言語となり、一般の原住民にも広がる

...1928年：民族統一の言語「インドネシア語」※として採用

※「インドネシア」という造語

・「インド」+「ネーソス」(ギリシア語で「島」の意)の複数形=「インド諸島」の意味

・1850年、イギリス人弁護士がシンガポールで発行していた雑誌で初めて用いる。当時は、おおむね東南アジア、ポリネシアのオーストロネシア語族の地域を指した

・1920年代から民族解放運動指導者により、「蘭領東インド」や「東インド」に代わる民族のアイデンティティを表すものとして使われるようになった

22

22

※1928年10月28日：第2回インドネシア青年会議での「青年の誓い」

「我々インドネシア青年男女は、インドネシア国というただ一つの祖国、インドネシア民族というただ一つの民族、インドネシア語というただ一つの言語を支持します」

= 「一つの国家、一つの民族、一つの言語」(「多様性の中の統一」)というスローガン
→「インドネシア民族」としての自覚の高まり(「国民」意識の誕生)

→植民地ナショナリズムへ

23

23

※まとめ：蘭領東インドにおける「植民地ナショナリズム」とその偶然性

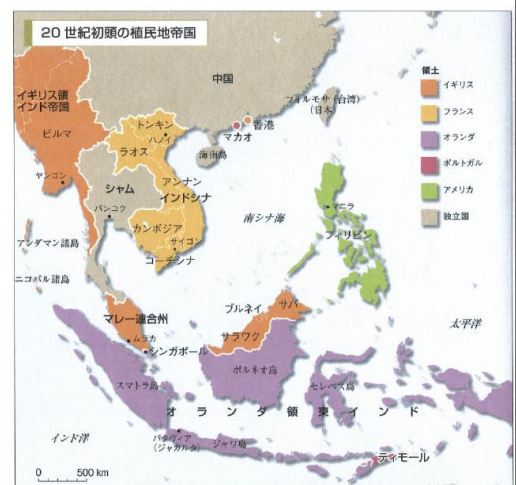
- ・植民地支配下における「教育の巡礼」と「行政の巡礼」、インドネシア語の誕生という様々な偶然的要素が重なって、「インドネシア国民」が出現した
- ・オランダが支配した領域の範囲→インドネシアの国境線となる

⇔これに対し、仏領インドシナではベトナム・ラオス・カンボジアという枠組みで「国民」意識が芽生え、別々に独立

※背景には...

- ・フランスがベトナム人を優遇したために、ラオ人とクメール人の「行政の旅」がビエンチャンやプノンペン止まりであったこと
- ・ベトナムの統一王朝フエの阮(グエン)朝によるクメール侵略と占領の記憶の存在など

ユーク・デルトレほか著(2018)『地図で見る東南アジアハンドブック』(鳥取絹子訳) 原書房, p.24



24

* まとめ：現代においてナショナリズムを考えることの意味

・ナショナリティ、ナショナリズムといった人造物は、個々別々の歴史的諸力が複雑に「交叉」するなかで、18世紀末にいたっておのずと蒸留されて創り出され、しかし、ひとたび創り出されると、「モジュール[規格化され独自の機能をもつ交換可能な構成要素]」となって、多かれ少なかれ自覚的に、きわめて多様な社会的土壌に移植できるようになり、こうして、これまたきわめて多様な、政治的、イデオロギー的パターンと合体し、またこれに合体されていったのだと。そしてまた、この文化的人造物が、これほどにも深い愛着を人々に引き起こしてきたのはなぜか…[アンダーソン 2007:22]

・宗教信仰は退潮しても、その信仰がそれまで幾分なりとも鎮めてきた苦しみは消えはしなかった。…そこで要請されたのは、運命性を連続性へ、偶然を有意味なものへと、世俗的に変換することであった。…国民の観念ほどこの目的に適したものはなかったし、いまもない。…偶然を宿命に転じること、これがナショナリズムの魔術である。[34]

※想像されたものにすぎないはずの「国民」意識が、なぜこんなにも我々を惹きつけるのか(私たちが、自身の存在や人生の意味を求めることと関係する?)

25

25

参考文献

- 土屋健治「『原住民委員会』をめぐる諸問題—支配と抵抗の様式に関連して」『東南アジア研究』15巻2号,1977
- ベネディクト・アンダーソン『定本 想像の共同体—ナショナリズムの起源と流行』(白石隆・白石さや訳) 書籍工房早山,2007

26

26